

アウグスティヌスの社会的三位一体論に関する一考察

—隣人愛の三一性モデルの可能性—

九里 秀一郎*

要約

本論では、アウグスティヌスの『三位一体論』は、しばしば心理学的と言われるが、社会的と呼ぶ方がふさわしいという点を強調したい。今回筆者は、アウグスティヌスが提唱した愛の原理「愛する人、愛するもの、愛」にもとづき、隣人愛の三一性モデルの可能性を検討した。隣人愛は社会の基本であるから、それを三位一体論から理解することは、記憶・知解・意志の三位一体を心理学的に分析するよりも有意義であると筆者は考えた。同様な取り組みは、愛の交わりの三位一体論を執筆した12世紀のリカルドゥスに見られる。彼の三位一体論が神秘的と言われるのに対して、この論文の議論は社会的かつ科学的であると著者は信じている。本論では、『三位一体論』第9巻以降の心理学的な考察とはまったく異なる観点から、第8巻をもとにした新たな考察が行われた。その結果、共通の愛にもとづく互いに愛し合う隣人愛に三一性モデルの可能性が見出された。今後の課題は、この共通の愛の理解を深めることである。

キーワード アウグスティヌス 社会的三位一体論 愛の三位一体 隣人愛

目次

- 1 序論
 - 1.1 研究の目的
 - 1.2 現代の神学的意義
 - 1.3 第8巻の概説
 - 1.4 重要な聖句と信仰的背景
 - 2 方法
 - 3 結果
 - 3.1 信仰の真理
 - 3.2 愛の真理
 - 3.3 隣人愛の三一性
 - 4 考察
 - 4.1 隣人・自己・神への愛の三一性
 - 4.2 一致しない隣人愛の三一性
 - 4.3 互いに愛し合う隣人愛の三一性
 - 5 結論
- 凡例
引用文献・注
参考文献

1 序論

1.1 研究の目的

本稿は、アウグスティヌスの『三位一体論』第8巻をテキストとして、隣人愛について考察する一連の研究の一つである¹。この研究は、キリスト教の基本的な教理である三位一体論と社会福祉の接点を探求し、キリスト教社会福祉と呼ばれる分野の基本的な原理を模索している。

アウグスティヌスの『三位一体論』²は全15巻から成り、前半はキリスト教の教理を中心とした解説、後半の第8巻から、独自の三位一体論が展開される。彼は人間の精神に神の似姿を探求し、最終第15巻で精神の三一性モデルを提案した³。このモデルは、しばしば心理学的三位一体論と呼ばれる。記憶・知解・意志または愛からなる精神の三一性を、父・子・聖霊なる三位一体の神の類比とする。第8巻は序章を含めて全部で11章からなり、最初から順にいくつかに分けて検討してきた。今回はそれが完了したので、第8巻全体を対象に検討する。

本論の目的は、アウグスティヌスが第8巻で行った議論をもとに、第9巻以降で精神の三一性モデルを考察したのと同じ手法を用いて、隣人愛の三一性モデルの可能性を検討することである。アウグスティヌスが「鏡を通して見るように、精神の記憶、知解力、意志に三位一体の似姿を見る⁴」と評価したような結果を期待している。精神の三一性モデルが個々の精神を対象としているのに対し、今回は異なる人格を持つ二つの精神を対象とする。互いに愛する二つの精神において、どのような三一的な関係が存在するのか、その可能性を検討する。

本論について、いくつかの研究動機がある。ひとつは、精神の三一性モデルが第8巻の結論の一例に過ぎないと考えていることである。第8巻では、隣人愛を中心に愛の実体について論じ、「愛する人、愛されるもの、愛」の三一性を理解することが神を知る方法だと結ぶ。しかし、第9巻以降では、精神に関する心理学的な分析が中心で、愛の三一性はすっかり影を潜めてしまうのである。本来は人間関係を対象とした三一性を論ずべきではないかと思うのである。さらに、アウグスティヌスは第15巻において、このモデルの優れた面だけでなく致命的な欠陥も指摘している点である⁵。記憶・知解・意志または愛という精神の三一性は人間という一つのペルソナの三機能に過ぎず、それを三つのペルソナである神と対比することが果たして適当なのかどうかと問い続けるのである。

1.2 現代の神学的意義

この研究の特長は、最近の社会的な三位一体論の原点をアウグスティヌスの三位一体論に求めるところにある。近藤勝彦⁶は、社会的三位一体論の意義について、次のように語る⁷。「神学的には、二十世紀の神学の中に三位一体論のルネサンスが見られることは、しばしば指摘されている通りである。その中の際立った特徴は、『社会的な三位一体』の再強調であろう。

これは、神学史的には近代におけるこれまでの神学が、概して『唯一の神』を主張するのに比して『三位の区別と関係』を主張する点で不鮮明であったのと、鮮やかな対比をなしている。近年の三位一体論史の文脈で言えば、『社会的三位一体』の強調は、特にカール・バルト⁸の三位一体論の主張に対する対極的な位置に立っている。バルトは、神の中の三つの位格を『存在様態』として理解し、三度にわたって同一の神を表わすと主張した。これに対し社会的三位一体論の系譜は、三位の区別を鮮明にし、それらの相互関係を強調する。L・ホッジソン⁹がすでにそれを提示していたが、モルトマン¹⁰、パネンベルク¹¹などがこの系譜に立っている。」

さらに近藤は、アウグスティヌスから始まる二つの歴史的な思潮について次のように語る¹²。「人格の自由・独立的概念あるいは自己意識的概念と、社会的・関係構成的概念との二者択一を避ける媒介の手がかりは、アウグスティヌスの三位一体論から二つの思潮が展開した思想史的事実に見出すことができよう。神学思想史的に言って、アウグスティヌスの精神、知性の分析から、人格を『理性的個性』として理解したボエティウス¹³を経て、デカルト、ヘーゲルにおける『自己意識的・主体的人格』の思想へと辿られるのは、西方的アウグスティヌスの思潮のすべてではない。人格思想をめぐってアウグスティヌスから出たもう一つの思潮があるからである。それは、サン・ヴィクトル学派¹⁴のリカルドゥス¹⁵による「愛の交わり」の三位一体論を経て、ドゥンス・スコトゥス¹⁶の関係的人格概念を経由する思想史である。」

現代の著名な神学者の一人であるパネンベルクは、神の一性から三つのペルソナを論じる歴史的な三位一体論の方法を批判して、アウグスティヌスの三位一体論が優れている点に注目している¹⁷。リカルドゥスも愛の一性から三つのペルソナを証明しており¹⁸、実際、彼の三位一体論に目を通すと、パネンベルクの指摘のとおり、明らかに一つの神から三つのペルソナが生まれたように見える。一方、パネンベルクは、アウグスティヌスの論証方法は、神の一体性は被造物の諸々の働きからのみ認識されうるといふ思想に立っているとし、可能性を含めて次のように語る¹⁹。「アウグスティヌスは、神的本質の一体性から三一論的区別を引きだそうとしなかった。彼が、三一性に関する彼の著作のなかで提出し、そして論究した諸々の心理学的類比は、一体性と三性の、ありうる調和—たとえわずかであれ—の表象を提供し、三一論的教義の諸言明に一定の説得力を与えるにすぎない。このような諸々の類比は、外に向かう諸々の神的な働きの共同性という命題にもかかわらず、可能である。」

本論は、アウグスティヌスの三位一体論の方法が共同性というテーマでも可能であるとするパネンベルクの主張に沿ったものである。この取り組みは、アウグスティヌスの愛の交わりの思想をもとに三位一体論を論じたサン・ヴィクトル学派のリカルドゥスが既に行っている。本論も彼の三位一体論に大きな影響を受けたが、本論とリカルドゥスが探求する立場はまったく異なる。リカルドゥスは愛の交わりにもとづく神論を展開したが、本論は現実の人間における愛の交わりの真理を求め、それに神の類比を求める方法である。この立場は結局は同じであると言えるかもしれないが、信仰と理性のどちらが先かの問題は、永遠の課題で

ある。ともあれ、アウグスティヌスの方法は信仰を背景とした理性的な探求であり、現代科学のように、自然から真理を探究する方法である。本論の結果をリカルドスの三位一体論と比較することは大変興味深いと思われる。

1.3 第8巻の概説

アウグスティヌスは、キリスト教の確立期である4～5世紀に、約二十年に及ぶ年月をかけて三位一体論を執筆した。その目的が三位一体の神の論証であることを、彼は次のように記している。「三位一体の神について語られ、信じられ、知解されることに対する根拠を提示し²⁰、聖書の権威によって信ずる者だけでなく、知解する者にも論証し、そして、敬虔にしてゆるぎない、合意を読者から得ることを願う。」

アウグスティヌス独自の三位一体論は第8巻から始まる。全体の構成は以下の表のとおりである。序章には、第8巻の目的として、「真理の本質が精神によって観られ得るために…今までの方法よりも内的な方法で遂行」すると記している。真理の本質を精神によって観るとは、三位一体の信仰を理解することである。彼は、これまでの人生で育まれた思想と信仰にもとづき、三位一体を論証するさまざまな方法に思いを巡らすのである。

表1 第8巻の構成

部	章	見出し	聖句 引用数	愛	神	心	善	義人	義	兄弟	隣人
I	序	信仰の真理。			9		6				
	1	真実と偉大さ。									
	2	人間の心の物的性質。	2		15	7					
	3	善の中に生き、動き、存在する人間。	2	9	6	49	85				
II	4	知られないものが愛され得るか。	5	12	11	10					
	5	神を知解する類似と比較が問われる。		12	9						
III	6	なぜ私たちが使徒を愛するのか。	1	35		46		47	22		
	7	愛とは何か考究しなければならない。	14	33	23						7
	8	神と隣人を同じ一つの愛から愛する。	7	92	46					18	
	9	なぜパウロの言葉に心が燃えるか。	9	14	8						
IV	10	善の愛。		18							
計				225	127	112	91	47	22	18	7

注：[6] 表1再掲、聖句は新約聖書のみ、節単位の総数。単語の使用数を愛、神等について示している。

第8巻の概要は次の通りである。最初に三位一体に関する当時の信条を信仰の真理として簡潔にまとめる。続いて、この真理が形而上学的なものとは違う点を明らかにし、第3章から三一性に関する独自の議論を始める。回心の経験にもとづく善の思想、知と愛に関する様々な心理学的な分析を経て「愛する人、愛するもの、愛」という三一性を見出す。三位一体の神は、この三一性を精神に求めることによって論証可能であると結論付ける。

1.4 重要な聖句と信仰的背景

アウグスティヌスの信仰が第8巻に深く影響していることは言うまでもない。議論では、彼のそれまでの人生で育まれた思想、あるいは、第8巻の主題に直結した聖書の言葉が随所に用いられる。本論は「聖書の權威によって信ずる者だけでなく、知解する者にも論証して合意を得る。」という、アウグスティヌスと同じ方針を踏襲したい。そのために、信仰と理性の微妙な境目にある今後の議論の参考として、あらかじめ、第8巻に関係する「重要な聖句」、信仰と思想に根差した重要な言葉を「信仰的背景」として以下にまとめる。

(1) 重要な聖句

本論に関係する最も重要な聖句は、①「二つの掟」、②「神は愛」である。この二つに関係する聖書箇所は複数あるが、アウグスティヌスと同じ部分のみ引用する。

①「二つの掟」

イエスは言われた。「『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている。」(マタ22:37-40)

②「神は愛」

愛する者たち、互いに愛し合いましょう。愛は神から出るもので、愛する者は皆、神から生まれ、神を知っているからです。愛することのない者は神を知りません。神は愛だからです。」(Iヨハ4:7-8)

(2) 信仰的背景

アウグスティヌスは新プラトン主義の思想に強く影響を受けている²¹。しかし、彼の思想は新プラトン主義に由来する善の思想だけではなく、パウロを通して得た愛の信仰が融合している²²。第8巻で、彼の思想と信仰が融合した主な言葉を、以下に記す。神を「善」(①)²³、イエス・キリストを「謙虚の模範」(③)と表現するところに、その特長が顕著に表れている。

- ① この善は私たち各自から遠く離れて在るのではない。私たちはこの善の中に生き、動き、存在する(使徒17:27, 28)からである。(三8:3:5:2)
- ② まだ見ぬものを信じ、信じるものを望み愛する心においてでなければ、あの信仰、希望、愛(Iコリ13:13)はどこにあるのであろうか。この三つを心に建てるために聖書全体の仕組みが協力するのである。(三8:4:6:2)
- ③ 謙虚の模範を与えるため、かつわれらに対する愛を明らかにするため、神がわれらのために人間として造られたことを私たちが信ずるとき、私たちの思念はこの知識によって形成されるのである。(三8:5:7:1)
- ④ 君が愛を見るなら、君は三位一体を見るのだ。しかし、私は出来るなら、君が三位一体を見ることを君に見させるため気づかせよう。すなわち、私たちが愛によって或る善へ動かされるために三位一体のみを現在せしめよ。(三8:8:12:2)
- ⑤ すなわち、私たちとは比較にならぬほど神に、しかし私たち自身と同じほど兄弟に愛を

傾注しなければならない。私たちは神を愛すれば愛するほど自分自身を愛するのである。したがって、私たちは神と隣人を同じ一つの愛から愛するのである。しかし私たちは神のために神を、神のために自分自身と隣人を愛するのである。(三8:8:12:3)

- ⑥ 聖書がこれほど賞揚し告知する愛 (dilectio, caritas) は、善の愛 (amor) でないなら、一体何であろうか。(三8:10:14:1)

2 方法

隣人愛の三一性に求められる条件として、第8巻を二つに分け、序章～第2章を三位一体の「信仰の真理」、第3章～最終第10章を「愛の真理」と題して、真理にふさわしい内容をテキストから抽出して整理する。「愛の真理」にもとづいてモデルを考案し、それを「信仰の真理」と対比する。信仰の真理は、アウグスティヌスが当時広く理解されていた三位一体論の信条に相当するものを序章でまとめた内容である²⁴。第8巻では、アウグスティヌスは「愛する人、愛するもの、愛」という、愛の原理を精神に求める独自の探求方法を主張する。その結論に至るまでの議論の中から、重要な根拠をテキストから抽出して「愛の真理」としてまとめる。

次に、隣人愛の三一性にはどのような形態があり得るかを検討する。愛の真理を根拠としつつ、信仰の真理を条件として、筆者の自由な発想で行う。アウグスティヌスは精神の三一性を検討する中で、実に多様な三一性に遭遇した。視覚をとおして精神に刻まれる像の三一性なども検討したが、多くは信仰の真理に照らして不適當なものばかりであった。隣人愛における三一性でも、同様な事情がありそうであるが、その中から、最善のものを選んで次の段階に進む。

最後に、信仰の真理と隣人愛の三一性を対比した評価である。アウグスティヌスが『三位一体論』第15巻において、記憶・知解・意志または愛からなる精神の三一性を父と子と聖霊の特長と比較したのと同じ手続きである。モデルとしての有効性と限界を明らかにする。

本論は隣人愛の三一性モデル可能性を探る初期の段階である為、第二段階と第三段階はモデル案の検討に当たって一体的に行う。すなわち、「信仰の真理」を意識しつつ「愛の真理」を根拠に論ずる。聖書を含め、すべての関係資料をデジタル化し、検索機能を駆使して逐一根拠を確認しながら研究する。

3 結果

3.1 信仰の真理

序章には当時の三位一体論の教理が信仰の真理として簡潔な文章にまとめられている。新約聖書に登場する父・子・聖霊と表現される神が三つではなく一つの神であるということを論理的に文字で表現したものである。本論では、隣人愛の三一性モデルを検討する際に教理を具体的に活用するので、その基本的な姿勢を最初に確認したい。

三位一体論は歴史的になかなか受け入れられなかった。その理由は、父と子という表現で

は子は父より後に生まれたので永遠の神とはならないこと、神が三つ存在しては一つの神にはなりにくいこと、以上二つに合意が容易に得られなかったのである。この難問を解決するため、四世紀にローマで公会議が開催され、信条という形式で一応の合意が形成された²⁵。序章の内容は、父・子・聖霊を三つのペルソナとして、その特性を論理的に記述したものである。しかし、私たちの日常的な時間・空間・物質に対する感覚ではペルソナを理解することが困難である。そのため、三位一体論は不要であるという歴史的な流れが現在まで一部では続いている²⁶。

20世紀になって自然観はアウグスティヌスの時代とは全く異なり革命的に変化した。説明は割愛するが、私たちの眼に見えないマクロ・ミクロの世界の新しい自然法則が発見され、ペルソナと似た多くの現象が知られている²⁷。そういう意味で、現代科学の発達によって、三位一体論は必ずしも荒唐無稽な物語ではなくなったのである。アウグスティヌスは、私たちの世界の形而上学的な実体とペルソナを対比させ、三位一体の神のモデル（類比）を構築する方法で三位一体を論じた。これは、まさに現代科学の手法とまったく同じである。彼は記憶、知解、意志の三つによる心理学的なモデルを構築した。これは一つの例に過ぎず、それ以外にもペルソナの性質と似た三つの組み合わせを、私たちの知っているものから見つけられそうである。注意すべき点は、信仰の真理は永遠・不変なものであり、私たちの世界は変化する。従って、変化する世界の究極の姿として信仰の真理と比較するのである。当然、このような比較論証には限界がある。もちろん、神を証明するのでもなく、モデルを拝むのでもなく、理性にもとづく信仰理解が目的である。

以上が、三位一体の信仰の真理を本論で活用する基本的な姿勢である。今後のモデル構築に役立つよう、序章の内容を以下に箇条書きにして示す。本論では、三位一体にラテン語表記である「三つのペルソナ一つの本質」を用いる²⁸。①は三つのペルソナの関係性について、②③は一つの本質について、④はペルソナの大きさ²⁹に関する規則である。

< 信仰の真理 >

- ① 父と子そしてこの両者の賜物である聖霊のように相互関係的に言い表わされるものは、個々のペルソナに、固有の意味で、かつ区別されて、属していると言われる。
- ② 個々のペルソナが各自自身に対して語られるときは、複数で三つが語られるのではなく、一つのもの、すなわち三位一体御自身が語られる。神の場合、存在することが直ちに偉大であること、善であること、知恵あることであるゆえ、これらの特性は本質によって言われるからである。そしてこれはみな個々のペルソナがそれ自身に対して、あるいは三位一体御自身として語られることである。
- ③ 三つのペルソナあるいは三つの実体と言われるのは、そこで本質の或る相違が理解されるようにはなく、この三つとは何か、この三つのものとは何か、と言われるときに、或る一つの語で答えられ得るようである。
- ④ 神の三位一体においては、父が神性に関しては、子よりも大きくないだけでなく、父

と子も共に聖霊よりも大きくないというほどに等しさがあり、また三つのペルソナのいずれのペルソナも三位一体御自身よりも小さくないのである。

3.2 愛の真理

アウグスティヌスが第8巻で考察した三位一体を理解する方法論は「愛する人、愛するもの、愛」という愛の三一性を精神に探求するというものである。この結論は、第3章～最終第10章における「善」を中心とした議論の結果である。そこで論じられた内容は、新たな隣人愛の三一性モデルの基本的な条件と言える。そこで、愛の三一性を構成する命題をテキストから抜粋して、「愛の真理」として以下にまとめる。

<愛の真理>

- ア. 私たちを存在せしめたまうこの善の現臨を享受³⁰するためには、愛によってこの善のもとに立ち留まり、この善に固着しなければならない。この善がなければ私たちは存在することが出来ない³¹。(三8:4:6:1)
- イ. しかし、誰が知らないものを愛するであろうか。知られ得るが、愛され得ないものがある。私は問う。知られないものが愛され得るのであるだろうか、と。もしそれが可能でないなら、誰も神を知る前には愛さないことになる。神を知るということは、彼を精神によって観て確固として認めることでないなら、何であろうか。(三8:4:6:2)
- ウ. 真実なものこそ愛と言われなければならない。そうでないなら、それは欲望である。愛する人が誤って欲求と言われるように、欲望を持つ人は誤って愛と言われる。真実の愛とは、私たちが真理に固着して正しく生きることである。(三8:7:10:1)
- エ. 隣人を愛する人は必然的に、とりわけ愛そのものを愛する。(三8:7:10:3)
- オ. 私たちが愛を愛するとき、或るものを愛しつつ愛するのは、愛は或るものを愛するということのゆえである。だから、愛そのものも愛され得るために愛は何を愛するのであるだろうか。実に何ものも愛さない愛は存在しない。(三8:8:12:3)
- カ. 愛は或る愛する人の愛であり、愛によって或るものが愛されるのである。視よ、ここに三つのものがある。愛する人と愛されるもの、そして愛である。したがって愛とは愛する人と愛されるものという二つを一つにし、あるいは一つにしようとする或る生命でないなら、何であろうか。それは外的・肉的な愛についてもあてはまる。(三8:10:14:2)
- 最終章に記されている「愛する人、愛されるもの、愛」が愛の三一性である。カテゴリーが共通と思われる項目をまとめて整理すると以下の通りである。

- ① 愛の対象は善であり真理である。(ア、ウ)
- ② 知らないものは愛せないが、信じて愛することもある。(イ)
- ③ 隣人を愛することは愛そのものを愛することである。(エ、オ)
- ④ 愛には三一性がある。(カ)

さらに、愛の普遍性である①と④を一つにまとめると以下の通りである。

- ① 愛の対象は善と真理、「愛する人、愛されるもの、愛」からなる愛の三一性がある。
- ② 人は知ること、あるいは、信じることによって愛する。
- ③ 隣人を愛することは、愛そのものを愛することである

以上から、愛の真理は、①普遍的真理、②人間の真理、③隣人愛の真理の三つで構成されると考えられる。

3.3 隣人愛の三一性

(1) 隣人とは誰か

「隣人愛の三一性モデル」という時、隣人とは聖書や一般的な意味での隣人ではなく、アウグスティヌス自身が隣人と呼ぶ人々が対象である。聖書でも、時と場合によって、話題の対象という意味での隣人が、イスラエル人や弟子などに限定されることも多い。隣人愛の三一性を論ずる前に、隣人とは誰かを、アウグスティヌスの「三位一体論」第8巻の場合に明確にする必要がある。

第8巻には他人を愛する話題が大変多くあり、他人を表す言葉は特定の人名から一般名詞までいろいろ使われている。人名には、マリアやラザロなど、他にもあるが、中でも最も重要な個人名はパウロである。一般名詞では、使徒、義人、兄弟、隣人があり、弟子という語がまったく使用されていないのは興味深い。

第8巻の構成を参考にすると(表1)、第6章では使徒、義人が、第7章で隣人、第8章で兄弟が用いられている。第6章では、「神を愛するように知るとは、私たちが使徒・義人を愛するように知るのか。」という問いがテーマである。第7、8章では、新約聖書の二つの掟の解釈が話題の中心となっており、「神を愛することと隣人を愛することの同源性」がテーマである³²。

「兄弟」は、家族の兄弟姉妹や信者という意味ではなく、身近な隣人の意味で用いている³³。その根拠は、「私たちが、愛によって愛するものを他にして何を愛するのであろうか。それは、私たちが近くにあるものから出発するために、兄弟である。」という文と、「私たちは神と隣人を同じ一つの愛から愛するのである。しかし私たちは神のために神を、神のために自分自身と隣人を愛する。」(三8:8:12:3)という文が同じ段落の中にあり、「身近な兄弟」と「隣人」が、特に区別なく用いられているからである。

参考までに、アウグスティヌスが『三位一体論』を執筆する少し前に著した「キリスト教の教え」第1巻30章には、隣人とは「今必要としているときにはあわれみの義務を負い、将来万一必要となるときには義務を返す人」とであると語る。アウグスティヌスはパウロの異邦人伝道、サマリア人のたとえ話を熱く語る場所に見られるように³⁴、隣人とは全ての人を対象としている³⁵。

(2) 隣人愛の三一性

愛の真理の最大の特徴は愛に実体を考えることである³⁶。愛の実体は二つを一つに結びつ

ける力として、愛の三一性を形成する最も重要な要素である。具体的な例として、第6章における「義の形相」、第7章、8章における「愛そのもの」がある。「義の形相」とは、人が義人を愛する判断基準である³⁷。義人を愛するには、この義の形相にもとづいて愛するのであり、愛の一つの実体と捉えている。

この形相に関する議論に続いて、第7章から「愛とは何か」について、聖書の二つの愛の掟をもとに³⁸、「愛そのもの」の探求が始まる。この議論は、愛の真理の中で、「愛そのものを愛する。」(オ)の課題である。第8章では、「愛そのものを愛すること」と、「隣人(兄弟)を愛すること」との間に密接な関係のあることが論じられる。この一連の経過について、テキストから重要な部分を抜粋して以下にまとめる。

- ① 誰も、私は何を愛するのか知らない、と言ってはならない。兄弟を愛させよ。そうすればこの同じ愛を彼は愛するのである。というのは、彼は愛する兄弟よりも、彼にそのように愛させる愛のほうをよく知っているからである。(三8:8:12:1)
- ② 私たちが愛を愛するとき、或るものを愛しつつ愛するのは、愛は或るものを愛するということのゆえである。だから、愛そのものも愛され得るために愛は何を愛するのであろうか。実に何ものも愛さない愛は存在しない。(三8:8:12:3)
- ③ 愛もたしかに自己を愛するが、もし自己を或るものを愛しているものとして愛さないなら、愛として自己を愛さない。(三8:8:12:3)
- ④ したがって、私たちが、愛によって愛するものを他にして何を愛するのであろうか。それは、私たちが近くにあるものから出発するために、兄弟である。(三8:8:12:3)

これらは、兄弟を愛することと、自分自身を愛すること、この二つが同時に存在するべきであることを主張している。そこで、隣人愛の三一性として、次の二つが導かれる。

＜隣人愛の三一性＞

A 愛する人、愛する隣人、隣人を愛させる愛(他人を愛すること)

B 愛する人、隣人を愛させる愛、愛そのもの(自己を愛すること)

他人を愛する時、自分に他人を愛する根拠が存在するという理屈により、他人を愛する三一性と(A)、自己を愛する三一性と(B)が同時に成立する。この結果は、「二つの掟」の内の一つ「隣人を自分のように愛しなさい。」の別の表現であり、もともと二つの掟から議論を始めたので当然の結果とも言える。さらに、アウグスティヌスが考案した心理学的な精神の三一性モデルは、隣人愛においては自己と隣人の両方の精神の理解に不可欠であることを示している。自己の記憶・知解・意志、他人の記憶・知解・意志、それぞれの三一性の相互作用が隣人愛において起こるからである。そういう意味で、隣人愛における心理学的な精神の三一性という新しい枠組みが形成される。

(3) パウロの例

上記の三一性の議論の一例が、アウグスティヌスが親愛の情を込めてパウロに語った言葉

の中に見られる。第8巻最終直前の第9章の言葉である。これは、三位一体論の全体の中でも特に長い聖書の引用として注目される部分である³⁹。少し長くなるが、隣人愛の三一性を具体的に理解するために、この部分の言葉を以下に引用する。

私たちがこのような言葉を読んで使徒パウロへの愛に燃え立たしめられるのは、私たちが彼はこのように生きたのだと信ずるからでないなら、どうしてであろうか。しかも、神の奉仕者はこのように生きるべきであるということは、私たちが誰かから聞いて信ずるのではなく、内的に私たち自身において、あるいはむしろ、私たちを超えて、真理そのものにおいて凝視するのである。したがって、このように生きたと信ずる彼を私たちが見るこのもの〔形相〕に基づいて愛するのである。私たちが常に確固として変らざるものと認めるこの形相を何よりも先ず愛するのでなければ、彼を愛さないであろう。それは、私たちは彼が肉において生きたとき、彼の生はこの形相に適合し一致していたもの、と信仰によって思うからである。しかし、私はいかにしてか知らないが、私たちは或る人がそのように生きたと信ずる信仰によって、より烈しく形相そのものの愛へと促されるのである。また人間である私たちも、或る人々がそのように生きたということから、そのように生き得ることに決して絶望することなく、これをより熱心に欲し、一層確信して願望する希望へと駆り立てられるのである。」(三8:9:13)

「或る人がそのように生きたと信ずる信仰」という部分の「或る人」とは、信仰の対象と書かれているのでイエス・キリストのことであろう。続く文にある「或る人々」とは、人間であると書かれているので「使徒」であろう。愛の三一性に関するアウグスティヌスの信仰の背景は、イエス・キリストによって示された人間への愛と、そのイエス・キリストを愛して人生を捧げた「使徒」への愛である。

4 考察

4.1 隣人・自己・神への愛の三一性

隣人愛の三一性A、Bが二つになる理由は、結果の説明で引用した部分以外にもある。例えば、「知らないものは愛せない。」という愛の真理(イ)も、その理由として分かりやすい。隣人を愛するには、隣人に関する情報が必要であり、それを何も持たずに隣人を愛することはあり得ない。自己にある隣人の情報が悪いものであったら、隣人を愛するどころか、遠ざけることになる。

隣人愛と自己愛の二つが同時に現れたことは、信仰的には「神と隣人を同じ一つの愛から愛する。」(信仰的背景⑤)を思い起こさせる。もし、神と隣人を同じ一つの愛から愛するならば、奇抜な発想ではあるが、神を隣人のように親しい存在にできないだろうか。そのために、神も隣人のような三一性が存在すると信じられないだろうか。そこで、隣人愛の三一性A、Bに続けて、神も隣人並みの扱いで人間との間の三一性を以下に記す。

＜隣人愛の三一性＞

- A 愛する人、愛する隣人、隣人を愛させる愛（他人を愛する）
- B 愛する人、隣人を愛させる愛、愛そのもの（自己を愛する）

＜神への愛の三一性＞

- C 愛する人、愛する神、神を愛させる愛（神である他者を愛する）
- D 愛する人、神を愛させる愛、愛そのもの（自己を愛する）

この神への愛の三一性C、Dは、神を隣人とする特別な信仰の形であって、議論の対象ではない。しかし、神を最高の善と置き換えるアウグスティヌスの思想においては、善は神ではなく、神のような現実的な存在である。従って、神への愛の三一性C、Dによって隣人愛の三一性の理解が容易になると同時に、その課題も明らかになる。

注目すべきことは、これらの三一性において二つを一つに結合する愛の実体、「隣人を愛させる愛」「神を愛させる愛」「愛そのもの」が何か、という点である。仮に、これらの三つすべてが同じであると考えれば、神を愛するように隣人と自己を愛するのである。神は愛であり、神からの愛が、自分にも隣人にも注がれる豊かな信仰である⁴⁰。

本論は、神は愛であるという信仰を背景に置いて、隣人愛について、人間の心を対象に心理学的に論じたい。神への愛の三一性C、Dを参考にするならば、隣人愛の三一性における「隣人を愛させる愛」と「愛そのもの」は、隣人にとっても自己にとっても共通の善、共通の真理に固着する真実の愛（愛の真理（ウ））を考えることができる。

4.2 一致しない隣人愛の三一性

アウグスティヌスが精神の三一性モデルを検討する中で、三つの要素に物質と同じような大小の性質があるかどうか、複数のモデルについて調べた⁴¹。各要素を加えると元より大きくなるという性質があると三位一体のペルソナを複数加えても大きさが変わらない性質（信仰の真理④）を満足できないからである。隣人愛の三一性についても事情は同じであり、少なくとも三つは物質的では無い、いわゆる形而上学的な対象、すなわち三つは心を対称とするのが適当である。

しかし隣人愛の三一性Aは、自分と他人が別の存在であるように、自分の心と他人の心を別の存在とするならば、信仰の真理④を満足しない。第8巻2章でなされる心の物質的な性質の議論では、複数の心を併せると一人の時より、いくらでも大きな心に成り得るからである⁴²。三つの心が単なる物質的な三つの塊では三つのペルソナとは違うのである。一方、自己を愛する場合の三一性Bは、「愛する人、隣人を愛させる愛、愛そのもの」という各要素は、すべてが自己の心の内にあり、一つの心の大きさが最大であって、それを超えることは無い。三つの大きさが変化して、それぞれが最大の大きさになる可能性があれば、信仰の真理④を満足し得る。

このような隣人愛の三一性Aの問題は、使徒や義人など、他者を一方的に愛する議論の延長として論じてきたことに起因すると思われる。そもそも、「愛する人、愛されるもの、愛」

の三一性において、「愛する人」と「愛されるもの」の心が分離した関係にある場合には、二つの心は信仰の真理④を満足できないのである。隣人愛の三一性モデルは、一方的な形の隣人愛の形では不十分であり、何かの別の形を考えなければならない。

4.3 互いに愛し合う隣人愛の三一性

二つの心が一つとなることは世の中にはいくらでもあり、聖書にも「心をつにする」という言葉は多い。例えば、「はっきり言うておくが、どんな願い事であれ、あなたがたのうち二人が地上で心をつにして求めるなら、わたしの天の父はそれをかなえてくださる。」(マタ18:19)他にも、「終わりに、皆心をつに、同情し合い、兄弟を愛し、憐れみ深く、謙虚になりなさい。」(一ペト3:8)などがある。旧約聖書では、エレミヤが次のように預言を語る。「わたしは彼らに一つの心、一つの道を与えて常にわたしに従わせる。それが、彼ら自身とその子孫にとって幸いとなる。」(エレ32:39)

二つの心が一つとなることを聖書は互いに愛し合うと言う。新約聖書では、イエスが弟子に「互いに愛し合いなさい。」と、次のように掟として語った。「あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」(ヨハ13:34) リカルドスも相互の愛について、次のように語る。「相互の〔愛〕でなければ、喜ばしい愛はありえないのである。それゆえ、真の最高の幸福の内に、喜ばしい愛と同様に、相互の愛が欠けることはありえないのである。しかるに、相互の愛においては愛を呈する者と愛を返す者とがどうしてもいなければならない⁴³。」

聖書が互いに愛し合うことを勧めることを参考にすれば、隣人愛の三一性Aを、互いに愛し合う関係に至る経過と捉えることができないだろうか。相互の愛が同時に起こることはあり得ないから、最初にいずれか一方が隣人を愛し、他方はそれに応じて愛することから互いに愛し合う関係が始まると考えるのである。「愛する人、愛される人」という表現では、前者が先に愛した者であり、リカルドスの「愛を呈する者 愛を返す者」という表現では「愛を呈する者」が先である。こうして始まった隣人愛が、主体を交互に代えながら、互いに愛し合う関係へと成長する過程が考えられないだろうか。

以上の考察から、隣人愛の三一性Aが信仰の真理④に不適合という問題は「互いに愛し合う」関係によって解決できそうである。リカルドスは、「喜ばしい愛」が「互いに愛し合う愛」であることを次のように語る。「実に、互いに愛し合っている両者が最高の願いをもって相手を抱きしめ、双方の最高の愛の内に喜びに満たされるなら、一方の親密な愛の内に他方の最高の喜びがあり、逆に他方の愛の内にもう一方の最大の喜びがあるのである⁴⁴。」この言葉は、父と子の相互内在⁴⁵に関する次の言葉と似ている。「父よ、あなたがわたしの内におられ、わたしがあなたの内にいるように、すべての人を一つにしてください。彼らもわたしたちの内にいるようにしてください。そうすれば、世は、あなたがわたしをお遣わしになったことを、信じるようになります。」(ヨハ17:21)

そこで、相互内在性を踏まえた新たな隣人愛の三一性を検討するために、「愛する人、愛

される人」に代えて、「愛する人、愛に答える人」として、互いに愛し合う関係を表現してみよう。これは、父と子の関係のように、父を起源とする関係を「愛する人」に対応させ、信仰の真理①の要件を考慮したからである。「愛する人」が存在したからこそ、初めて「愛に答える人」が存在したという関係である。

こうして愛が始まり、二人が互いを愛する過程で、共通の愛が成長していくと考えられる⁴⁶。その結果、少なくともその一致した愛の部分で互いの共通の愛の実体と見なすことができる。その結果、互いに愛し合う愛の三一性として、次の三つの形を考えることができる。

＜ 互いに愛し合う愛の三一性 ＞

- E 愛する人、愛に答える人、互いに共通の愛 （他人を愛する）
- F 愛する人、互いに共通の愛、愛そのもの （愛する人が自身を愛する）
- G 愛に答える人、互いに共通の愛、愛そのもの（愛に答える人が自身を愛する）

Eとその他の関係は、隣人愛の三一性におけるAとBの関係と同様に、前者は他人を愛すること、後者は自分自身を愛することである。この三一性の特長は、互いに共通の愛が、各人の心の中に存在して、それが一致して成立する点である。そのような愛がどのようなものであり、どのように生まれ成長するかが、今後の重要な課題である。

一つの例として、「一人はみんなのため、みんなは一人のために」という、よく知られた社会的な愛の言葉を考えてみよう。この言葉は、二人の隣人だけではなく、もっと多くの人々が対象である。この場合「互いに共通の愛」とは何だろうか。例えば、個人として隣人を愛する愛と、隣人全体を愛する愛が同じであり、それを全員が互いに共通の愛として共有していると考えられないだろうか。隣人を愛する愛と全体を愛する愛が同じで等しく、それをすべての人が共有するというモデルである。紙幅の関係で別の機会に検討したいと思っているが、これこそ社会的な愛の三位一体論なのかもしれない。

5 結論

本論の目的は、アウグスティヌスが『三位一体論』第8巻で行った議論をもとに、第9巻以降で精神の三一性モデルを考察したのと同じ手法を用いて、隣人愛の三一性モデルの可能性を検討することである。この研究の意義は、最近の社会的な三位一体論の原点をアウグスティヌスの三位一体論に求めるところにある。

本論では、最初に第8巻全体を「信仰の真理」と「愛の真理」に分けて整理し、続いて「隣人愛の三一性」から「互いに愛し合う三一性」まで、各種の三一性を検討して隣人愛の三一性モデルの可能性を検討した。その過程で、いくつかの重要な点が見出された。一つ目は、隣人愛の三一性には、他者への愛と自己への愛が共存する点である。他人を愛するには自分に愛する根拠があるという、アウグスティヌスが「形相」として繰り返し語っていた真意を改めて確認することとなった。二つ目は、一方的に隣人を愛する形式の三一性は、三位一体のペルソナの大きさに関する規則を満足しないという点である。この欠陥を克服するた

めに、互いに愛し合う愛の三一性を考案した。聖書にも互いに愛し合う掟があるように、互いに愛し合う三一性の構造においてもモデルの可能性が開かれたのである。二つの心が共通の愛を愛することによって、愛の真理と三位一体の信仰の真理の両方を満足する可能性がある。今後さらに、これらの三一性がモデルと成り得るか慎重に検討する必要がある。

今回の検討結果を発展させて隣人愛の三一性モデルを確立するには、さらなる心理学的考察と信仰的な理解を深める必要がある。アウグスティヌスが行った記憶・知解・意志または愛にもとづく精神の三一性を隣人愛の理解に応用する方法も考えられる。特に、今回は触れなかったが、アウグスティヌスの原点にある回心の思想を、隣人愛の中に融合させなければならない⁴⁷。回心は信仰とも密接に関係していて、人間に内在する罪と救いの問題は、人間と神の間だけではなく、隣人との間においても決定的に重要である。隣人愛の三一性モデルが、罪の内にある私たちが互いに愛し合う世界を共に創る一つの道として、個人から隣人を通して社会へ開かれ、社会的三位一体論へと拡張されることを願っている。

凡例

- ・聖書は日本聖書協会「新共同訳聖書」を使用する。
- ・聖句の引用は、文書の省略名に続いて、章と節をコロンで区切り表示する。
[例] ヨハ1:1 (ヨハネによる福音書1章1節)
- ・参考文献リストにある文献の引用は、書名を省略して、文献リストの通し番号を [] 内に表示する。引用ページを指示する時は続けてページを記す。
[例] [1] p.12-13 文献リスト [1] の12から13ページ)
- ・アウグスティヌスの著作を一字の略称で示し、『三位一体論』を「三」、『キリスト教の教え』を「教」とする。
- ・アウグスティヌスの著作からの引用は、一字の書名略称に続けて、巻、章、節を：で区切りカッコ内に表示する。段落は必要に応じて節の次に：を置き、節ごとに、最初から付番した段落通し番号を表示する。ただし、序章の時は章番号に序と記す。
[例1] (三15:1:1) 『三位一体論』第15巻1章1節、
[例2] (教1:1) 『キリスト教の教え』第1巻1章

引用文献・注

- 1 [4] [5] [6]
- 2 [1] 本論テキストとして用いた日本語訳。必要に応じて、他の日本語訳、英語訳を用いた。
- 3 本論では「三一性」という語を三位一体の神と区別して日常的な三位一体を表す時に用いる。例えば、記憶・知解・意志を精神の三一性と表現する。「三一性モデル」とは、特別な三一性を三位一体の神の類比とする場合に用いる。例えば、「精神の三一性モデル」がある。本論以外では、神の三一性という表現も散見するので注意が必要である。
- 4 [3] p.35

- 5 [1] (三15:22:42)
- 6 近藤勝彦 (こんどう かつひこ) 1943年、東京に生まれる。東京大学文学部卒業、東京神学大学大学院修士課程修了、チュービンゲン大学に学ぶ。神学博士 (チュービンゲン大学)。東京神学大学教授、学長を経て、現在は同大学名誉教授。日本基督教団銀座教会協力牧師。(「救済史と終末論」—組織神学の根本問題3 2016年2月25日初版参照)
- 7 [7] p.137
- 8 [8] カール・バルトBarth, Karl (1886-1968) スイスの著名なプロテスタント神学者 (2020/3/9閲覧)
- 9 L・ホツジソン:Leonard Hodgson (24 October 1889, Fulham, London – 15 July 1969, Leamington Spa) was an Anglican priest, philosopher, theologian, historian of the early Church and Regius Professor of Divinity at the University of Oxford from 1944 to 1958. (ウィキペディア英語版2020/3/9閲覧)
- 10 [8] モルトマンMoltmann, Jürgen (1926~) (2020/3/9閲覧)
- 11 [8] パネンベルクPannenberg, Wolfhart (1928-2014) ドイツ・プロテスタントを代表する神学者、モルトマンはヴッパータール (Wuppertal) の神学大学のときの同僚である。啓示の概念を歴史に結びつけ、救済史を未来から理解する彼のキリスト論的立場は「下からのキリスト論」である。(2020/3/9閲覧)
- 12 [7] p.148
- 13 [8] ボエティウスBoethius, Anicius Manlius Severinus (475/80-524頃) 学問上の業績は哲学・神学はもとより数学・幾何学・音楽にまで及ぶ。特にアリストテレスの著作をラテン語に訳して解釈し、論理学、三位一体論、キリスト論に関して後世に大きな影響を与えた。(2020/3/9閲覧)
- 14 [8] サン・ヴィクトル学派：シャンポーのガイレルムスは1108年にパリのサン・ヴィクトル聖堂にアウグスチノ修道祭式者会修道院を創設したが、やがてそれは大修道院に昇格し、特に12世紀の盛期には信心と知的生活のセンターとして多くの著名な学者、神秘家、詩人らを輩出した。なかでも同派に方向づけを与えた最大の学者は「新しいアウグスティヌス」と呼ばれるフーゴである。(2020/3/9閲覧)
- 15 [8] リカルドゥス [サン・ヴィクトルの] Richardus (?-1173) サン・ヴィクトル学派を代表する神学者の一人。アウグスチノ修道祭式者会の会員。リカルドゥスは聖書とラテン教父の著作に精通しつつ、同時代の神学的問題に対しても深い関心を示した。カンタベリのアンセルムスの神学的方法に従ったが、聖書解釈においては霊的意味を取り出すことを旨としつつ、独自の神学を展開した。アベラルドゥスやペトルス・ロンバルドゥスの初期スコラ神学 (スコラ学) とは異なり、彼の神学は神秘神学であり、愛に基づく神の観想を中心にしている。(2020/3/9閲覧)
- 16 [8] ドゥンス・スコトゥスDuns Scotus, Ioannes (1265または1266-1308) (2020/3/9閲覧)
- 17 [9] p.312
- 18 [10] p.518: リカルドゥスは三位一体の探求の目的として第1章で次のように語る。「まず初めに吟味しなければならないのは、真にして純一なる神性に真の複数性がありうるものか、またそのベルソナの数、われわれの信じているように、三にまで及ぶものなのかということであろう。」
- 19 [9] p.313
- 20 [1] 「このようなわけであるから、われらの主なる神の祐けを受けて、わが力の及ぶかぎり、聖三位一体は唯一の真の神であること、また、父と子と聖霊は同一の実体あるいは本質であると正当にも語られ、信じられ、知解されること、に対する根拠を—そのことを私たちは強く求められているのである— 提示したい。」(三1:2:4)
- 21 [4] p.43 注20: 自叙伝『告白』の中で、アウグスティヌスはイエス・キリスト以外、聖書が多くの点でプラトン派の思想と一致していることを見出したと語る。また、存在するものがすべて善

であると考えることにより、それまで悩んでいた悪に実体の無いことを理解する。

- 22 [6] p.80 注38：自叙伝『告白』の中で、アウグスティヌスはプラトン派の書物に見られないものを見出そうと「使徒パウロの著作をむさぼるように読み」、その結果、「つねに同一の清らかな姿が、かれの貞節な言説を通じてわたしの目にみえたので、わたしは『おののきながら喜ぶ』ようになった。」とある。
- 23 [5] p.16 アウグスティヌスは使徒17:27, 28の一部の語を意図的に変えて主張を強調する。
- 24 [4] p.39
- 25 325年 ニカイア公会議
- 26 現在でも三位一体論を採用しないいくつかの教派が存在している。
- 27 例えば、三つで一つという現象は、最近実用化されている超電導のボース＝アインシュタイン凝縮とよく似ている。素粒子にはフェルミ統計とボース統計の2種類があり後者には凝縮という現象が知られている。超電導は電子がいくつ集まっても状態が変わらず一つのみであるという特異な現象で電気抵抗がゼロになる。超電導の他に粘性がゼロになる超流動という現象も存在する。
- 28 ギリシャ語では「三つの実体一つの本質」、ラテン語では「三つのペルソナ一つの実体」と訳される。アウグスティヌスは、ギリシャ語の「実体」がラテン語の「ペルソナ」になった経緯を説明している。(三7:48)
- 29 [4] p.37：ペルソナあるいは形而上学的実体に対する「大きさ」概念は「真実の程度」を意味し、次のように用いている。「父と子の共在は、父のみ、あるいは子のみの場合よりも真実なのではない。したがって、父と子の共在は父と子のうちの単独のものよりも大きくない。三位一体御自身も、その個々のペルソナと同じほどの大きさである。真理そのものが偉大であるところではより真実でないものはより大きくない。」(三8:1:2)
- 30 [2]：享受とはあるものにひたすらそれ自身のために愛をもってよりすすむことである。(教1:4:4)
- 31 [2]：「悦び、所有すること」は、かの三位一体、最高にして不変の善なる方において以外にはありえないからである。(教1:33:37)
- 32 [6] p.76
- 33 [6] p.78
- 34 サマリア人のたとえ話：すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」イエスが、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と言われると、彼は答えた。『「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい」とあります。』イエスは言われた。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」しかし、彼は自分を正当化しようとして、「では、わたしの隣人とはだれですか」と言った。イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。』さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

(ルカ10:25-37)

- 35 [2]: なぜならば隣人を愛するように命じ給うた主は、一人の例外も設けられなかったし、そのことを主みずから福音書の中ではっきり言われており、使徒パウロも明らかにしているからである。つまり、主は二つの戒めをある人に示して、律法全体と預言者はこの二つの戒めにかかっているとされた。…隣人とは今必要としているときにはあわれみの義務を負い、将来万一必要なときには義務を返す人のことである。(教1: 30:31)
- 36 [6] p.76 4. 2 カリタスと愛の実体
- 37 [6] p.75 4. 1 義の形相に関する心理学的考察
- 38 本論 1. 4 重要な聖句①
- 39 [4] p.17 表3: 特に長い引用
- 40 本論 1. 4 信仰的背景には挙げていないが、「愛が神から来る」という有名な次の聖句が引用されている。「希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。」(ロマ5:5)
- 41 [4] p.41 4. 第2章(1) 真理を遮る心の物的な似姿
- 42 [4] p.37
- 43 [10] p.522
- 44 [10] p.539-540: 第15章「神性における一對のベルソナは、等しい希求、類似した理拠によって、第三のベルソナを求めなければならないこと。」にある言葉。
- 45 [8] 相互内在性: 父と子と聖霊という三位一体の神の三つの位格(ベルソナ)が相互に内在し、相互のうちに現存し、浸透しあっているという、三位のダイナミックな交わりを表現する神学用語。この考えはヨハネ福音書(10:37-38; 14:9-11; 17:20-21)および1コリント書(2:10-11)にみられるが、教父たちによって徐々に明確にされていった。(2020/3/21閲覧)
- 46 [3] p.36: アウグスティヌスは聖書が人間の成長発達に応じて書かれていると語る。次の聖句などを、しばしば引用する。「幼子だったとき、わたしは幼子のように話し、幼子のように思い、幼子のように考えていた。成人した今、幼子のことを棄てた。わたしたちは、今、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔を合わせて見ることになる。わたしは、今は一部しか知らなくとも、そのときには、はっきり知られているようにはっきり知ることになる。それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。」(I コリ13:11-13)
- 47 [5]: 拙著“アウグスティヌスの三位一体論が描く隣人愛: 第8巻にある回心する心の心理学的な分析”

参考文献

- [1] アウグスティヌス. 三位一体論. 中沢宣夫訳. 東京, 東京大学出版会, 1989, 540p.
- [2] アウグスティヌス. キリスト教の教え. 加藤武訳. オンデマンド版, 東京, 教文館, 2011, 427p. (アウグスティヌス著作集6)
- [3] 九里秀一郎. “アウグスティヌスの三位一体論と社会福祉の接点に関する考察: 七つの聖句が描く三位一体論”. 浦和論叢. Vol.57, 2017-8, p.21-55 (2017)
- [4] 九里秀一郎. “アウグスティヌスの三位一体論が描く隣人愛: 第8巻で論じられる信仰と真理の形而上学的対比”. 浦和論叢. Vol.59, 2018-8, p.33-50 (2018)
- [5] 九里秀一郎. “アウグスティヌスの三位一体論が描く隣人愛: 第8巻にある回心する心の心理学的

- な分析”。浦和論叢。Vol.60, 2019-2, p.1-23 (2019)
- [6] 九里秀一郎。“アウグスティヌスの三位一体論が描く隣人愛：第8巻における愛の実体の探求”。浦和論叢。Vol.61, 2019-7, p.63-90 (2019)
- [7] 近藤勝彦。啓示と三位一体：組織神学の根本問題。東京，教文館，2007，304p.
- [8] 上智学院新カトリック大事典編纂委員会。新カトリック大事典。電子版，研究社，2006。研究社オンライン・ディクショナリー
- [9] パネンベルク・ヴォルフハルト。組織神学 第一巻。佐々木勝彦訳。東京，新教出版社，2019，518p.
- [10] リカルドゥス。“三位一体論”。小高毅訳。中世思想原典集成9 サン＝ヴィクトル学派。上智大学中世思想研究所編訳：監修。東京，平凡社，1996，p.515-554.

謝辞

この研究は多くの精神的な障害を持つ方々との交流から始まりました。さらに、教会や職場、福祉施設での多くの方々との出会いを通じて、キリスト教と社会福祉の関係に対する関心が深められたことにたいへん感謝しています。2019年9月、青山学院大学で開催された日本基督教学会において、学会長になられた近藤勝彦先生（東京神学大学名誉教授）に前年に続いてご挨拶させて頂きました。近藤先生の著書をとおして本研究の意義を改めて確認できましたことに、心より感謝申し上げます。

Summary

A Study on Augustine's Theory of Social Trinity:
Possibility of a Trinity Model for Neighbor Love

Shuichiro Kunori

This paper emphasizes that Augustine's Trinity is often referred to as psychological, but more socially. In this study, the author examined the possibility of a three-way model of love of neighbor, based on the principle of love proposed by Augustine: "the lover, what is being loved, and the action of love." I believe that understanding love of neighbor from the Trinity theory is more meaningful than psychologically analyzing the Trinity of memory, intellect, and will, because love of neighbor is the basis of society. A similar approach was found in the 12th century by Ricardus, who wrote the Trinity of Love fellowship. While his Trinity is said to be mysterious, the author believes that the argument in this paper is social and scientific. In this research, a novel discussion based on Volume 8 was conducted from a completely different perspective than the psychological considerations in the Trinity theory, Volume 9, and beyond. As a result, the possibility of a three-way model was found for neighbors who love each other based on common love. The challenge for the future is to deepen our understanding of this common love.

Keywords Augustine, Social Trinity, Trinity of Love, Love of Neighbor

(2020年5月14日受領)